

「家族の防災ラップソングデー」

人物表

櫻田京香（21）教育学部大学生

櫻田由美（55）京香の母

坂下悦子（82）京香の祖母

朝井勝利（82）悦子の友人

(概要)

教員を目指す京香は、防災講義から、徳島で一人暮らしの祖母・悦子が大津波に襲われる事を想像する。その話を母・由美にすると、埼玉の自宅に悦子を引取ると言い出す。悦子の説得に向かう京香と由美。だが悦子は引越しを頑なに拒否。その態度に由美は怒って帰る。悦子は避難先のタワーに登れないとして、寿命が先か、津波が先かと投げやりである。残った京香は防災への第一歩は体力作りだと考えて、体育の授業を悦子ら年配者に行う。

由美「京香。絶対、説得するのよ！」

京香「分かってるけど、急過ぎない？」

空港内の搭乗アナウンスが響く。

京香 M「母が、徳島に住む祖母を埼玉の自宅に引取ると言い出したのが昨日の夜。いつもの思い付きである」

由美「あー！」

京香「どうしたの？ お母さん」

由美「草加煎餅買うの忘れた・・・」

京香「そりゃそうよ。昨日の今日で、時間が無さすぎるし」

由美「アンタ、気付かなかったの！」

京香「え？ 私の所為？」

由美「お祖母ちゃんの大好物でしょう。草加煎餅。アンタも好きじゃないの」

京香 M「やっぱり、私の所為にしている。そ

れもいつもの事で、私は口を噤む」

由美「京香、ちよつと見て来るわ」

京香「ん。何を？」

由美「だから、草加煎餅よ。手土産って大事

じゃない。これから説得するんだから」

京香「搭乗手続き、始まっちゃうよ」

由美「（遠ざかり）何とかしなさい！」

京香「は？ 私に飛行機、止めろってか」

京香 M「今回の母の思い出きの原因は、私にもある。大学の授業で防災講義を聞き、徳島に一人で住む祖母へ想いを馳せたからだ。その話を母にすると、迫る南海トラフ地震への危機感から、祖母との同居を前々から考えていたと言い出したのだ」

タイトルコール「家族の防災ラプソディー」

煎餅を噛み砕く音。

悦子「(噛んで)ん。いつもと違う味だね」

由美「お母さん。煎餅の味はどうでもいいのよ。一緒に暮らしましょうよ。明彦さんの三回忌も終わったし、部屋もあるのよ」

京香 M「明彦とは私の父だ。三年前に癌で亡くなっている」

悦子「(噛んで)引越しなんかしないよ」

由美「だから、津波が来るの。ここは低いし」

悦子「知ってる。昨日今日の騒ぎじゃない」

由美「(舌打)京香からも何か言つてよ」

京香「うん。お祖母ちゃん。一人じゃ寂しくない？」

悦子「寂しくないよ。お祖父ちゃんが死んで、20年。もう慣れっこだよ」

京香「20年、一人か」

悦子「そうよ。由美も東京の大学出たら、そのまま、こっちに戻らないし」

由美「それは、ごめんだけど」

悦子「それより京香、大学生活はどう？　小

学校の先生になるのは大変なんだろう」

京香「うん。順調よ。ただ・・・」

悦子「ん？　どうかした？　」

由美「京香は運動音痴で悩んでる」

京香「（不貞腐れて）その言い方！　」

悦子「大学では運動するの？　」

京香「体育の実技があつて。私、スポーツと

か運動、苦手だから、教えられるか・・・」

悦子「私に似てる。運動嫌いな」

京香「そうなの？　」

悦子「若い時から走るの大っ嫌いだった」

京香「（笑って）本当。走るの私も嫌い」

悦子と京香「（笑い）」

由美「（怒って）尚更じゃないの！　」

京香「え？　何、怒ってるの」

悦子「そうよ。何？　」

由美「走れなければ、逃げられないのよ！　」

京香 M 「津波が迫れば、高台に避難しなければ

ばならない。この辺りの住民は、祖母の自宅近くにある、防災タワーに駆け登って避難するのだ」

由美「だから、一緒に住んで欲しいのよ」

悦子「そう簡単に引越しながら出来ないよ」

由美「ねえ。お願いだから」

悦子「そんな簡単に故郷を捨てられないよ。」

由美「みたいだね・・・」

由美「（怒って）お母さん！ その言い方はないじゃないの。別に捨てた訳じゃないわ」

悦子「・・・捨てたんだよ」

由美「・・・違うわ」

京香「どうしたの？ 喧嘩しないでよ」

悦子「由美はねえ、一人娘だろう。結婚して婿をもらってこの家を継ぐ約束だったんだ」

由美「・・・今更何よ」

悦子「だから罪滅ぼし何だろう。一緒に暮らそうだななんて・・・」

京香「罪滅ぼし・・・」

由美「（涙ぐんで）違うわ！　ただ、心配なの」

京香 M「それから暫く、母と祖母は黙ったままだった。私は母が継ぐべきだった祖母の家の中を見回し、大きい古民家である事に改めて気付く。黒光りする大黒柱が天井へと続き、居間と仏間を仕切る欄間には寺社仏閣にあるような彫刻が施されている」

京香「古いの。この家？　改めて見ると凄いなと思う。歴史の教科書とか、時代劇に出てきそうな造りじゃない」

悦子「市から文化財に指定されてるのよ」

京香「うあ。凄い。初めて知った」

由美「・・・だから私、嫌いだった」

京香「え？」

由美「古さに圧迫されそうだね。それで東京に逃げたのかもね」

悦子「娘が逃げ出したんじゃ、私はここに残るしかないでしょう」

由美「お母さん・・・」

悦子「津波が先か、私の寿命が先か」

京香「お祖母ちゃん。そんな事、言わないで」

悦子「（強く）年寄りなりの覚悟だよ」

由美「よし。分かった！」

京香「え？」

由美「サツサと帰ろう。京香。説得は失敗」

京香「そんな。これからが説得じゃないの？」

由美「説得なんか、土台無理な話だった」

京香「（強く）（抗議口調で）でも！このまま

帰る訳に行かないよ」

由美「（涙ぐんで）この人ねえ。私の話は昔っ

から聞かないで有名だったの。今、思い出

した・・・」

京香「（強く）私は帰らない。もう少し、お祖母

ちゃんと話がしたいよ」

由美「だったら、好きにして」

悦子「何も、怒って帰る事はないだろうよ」

由美「怒ってない。お邪魔しました！」

京香「あ！お母さん。本当に帰るの！」

勢いよくガラスの引戸が閉まる音。

悦子「・・・いつもそう」

京香「え？」

悦子「頭に血が上ると後先、見えなくなる」

京香「そうなの！昔から？」

悦子「そう。死んだお祖父ちゃんにそっくり

（溜息）

京香 M「私は祖母の吐いた長い溜息に、独り身の20年の寂しさを密かに感じ取った」

京香「私が、この家、継ごうか」

悦子「え？」

京香「私にも権利はあるのよね。孫だから」

悦子「（笑って）興味、持ったかい」

京香「うん。将来さ、小学校の担任教師になつたら、社会科見学で引率してくるよ」

悦子「そう。それまで長生きしないとね」

京香「そうだよ。津波が先か、寿命が先かな

んて、ヘンな事言わないでよ」

悦子「でもねえ。走れないし、ましてや、防災タワーの階段なんて、登れる訳ないわよ」

京香「あ！　そうだ」

悦子「何だい。急に大声で」

京香「お祖母ちゃん。私の授業、受けてみる？」

悦子「え？」

京香「体育の授業するのよ」

悦子「(怪訝に)体育？」

京香「そう。お祖母ちゃんに階段登るくらいの体力は付けて貰いたいし。何なら、お祖母ちゃんのお友達も呼んでさ」

悦子「(怪訝に)お友達も？」

ラジオ体操のリズム音。

京香「(朗らかに)はい。深呼吸。2、1」

悦子「(息荒く)久しぶりだよ。体操なんて」

朝井「(息荒く)ああ。でも、いい機会だ。お孫さんもよく気付いたね。体力作りが一番の

防災だなんてね」

悦子「ええ。体育の授業に自信が無かったみたいだけと・・・」

朝井「そんな事はない。良い先生になれるよ」

悦子「そうね」

京香「（朗らかに）はい。体育の授業はこれでおしまいです。最後にこれだけは忘れないで下さい。津波に襲われても絶対諦めないで下さい。生きて、生き延びて下さい！」

参加者からの拍手喝采。

京香 M「幸いにして徳島は津波に襲われてはいない。祖母も一人暮らしを続けている。そして私は体育の実技を落第して・・・」

悦子「（電話越し）私、登れたわ。防災タワーの上まで。京香のお陰よ。有難う。由美は元気かしら。今度、いつ遊びに来れるの？」

（了）